

もくじ

特別公開 舎人氷川神社本殿彫刻 … P1 はい、文化財係です! ④伊興遺跡公園内の  
方形周溝墓 … P2 お化け煙突60年⑫ 燃料① … P4

# 足立史談

第674号

2024年4月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

行列ができた特別公開

舎人氷川神社本殿彫刻に

二日で二二〇〇人



本殿の彫刻に魅せられる参加者 覆屋に保護され通常非公開の本殿彫刻  
の見学に足立区のみならず静岡や長野など他県からも参加者が訪れた。

■十二年ぶりの公開 去る二  
月二八日(水)と三月三日(日)、  
舎人氷川神社(足立区舎人五  
丁目二一)境内の本殿(足立  
区登録文化財)の彫刻特別公  
開が行なわれ、二日間二二〇〇  
〇人を超える参加者で賑わい  
ました。正面に龍の彫刻が施  
されていることから今年の干  
支「辰」を記念しての公開で  
す。十二年前の辰年にも公開  
されており二度目です。

代表総代の平柳義雄さん(右)と  
宮彫師井上進一さん(左) 本殿彫刻の奥で。



この催事は舎人町会・舎人  
氷川神社総代の皆さんと、足立区文  
化財係、郷土博物館の協働で開催さ  
れました。とくに総代の皆さんが会  
場の設営全般を行い、普段は上がれ  
ない拝殿や本殿に養生を施し、臨時  
の手すりや境界を設置するなど安全  
策を講じていただいたおかげで、二  
日間の開催期間中、彫刻の物損も事  
故もなく無事に特別公開が終了しま  
した。

■調査研究の出発点に 作品は参加  
者から感嘆の声があがる見事さで、  
見るものを圧倒します。しかし作者  
は銘や文献が未発見であることか  
ら、彫刻の様子から探る以外に方法  
がありませんでした。そこで郷土博  
物館の文化遺産調査特別展でご協力  
いただいた宮彫師の井上進一さんに  
ご来場いただきました。井上さんは  
寺院向けの雑誌で「現代の宮彫師・

井上進一の世界」(『大法輪』二〇  
一九年一月号)という特集が組まれ  
た方で、深大寺(調布市)や小田急片  
瀬江ノ島駅舎(藤沢市)の宮彫を手掛  
けています。

井上さんは、以前もこの彫刻を見  
学され、今回あらためて原品を熟覧  
し、その彫の形や、構造から作者を  
「高澤改之助」(八三三〜九)と数名に  
よる「工房作」と推定されました。

また二日目には宮彫刻の著名プロ  
ダグの一つ「北関東の宮彫・寺社彫  
刻」の筆者の方も見えになり、さ  
らなる情報交換が行われました。

代表総代の平柳義雄さんも地元舎  
人への郷土愛とともに調査研究を進  
めようとされており、井上さんをは  
じめ宮彫師の方々との出会いもふま  
え、あらためて彫刻の解明に意思を  
強くされています。



参加者の行列 列の先、拝殿の奥が本殿

今回、参加者が多かったことで多くの情報が集まってきました。例えば彫刻のテーマの一つ「天孫降臨」も彫師の方から「海幸彦と山幸彦」では？とのご意見があり、議論が始まっています。このように作者やテーマなど作品調査と研究の出発点に立てたこと、そして貴重な文化財という認識が広がったことが特別公開の成果でした。

今回の実現には郷土の歴史について御尽力されている足立史談会の会員で舎人町会の大熊久三郎さんの御力添えがあり、あらためて郷土史の蓄積を感じる出来事でした。今回の公開事業は舎人の町が歴史を受け継ぎ、伝えるための文化が息づいていることを実感します。

(足立区文化財係・郷土博物館)

はい、文化財係です ④2

### 伊興遺跡公園内の 方形周溝墓

伊興遺跡公園内には方形(四角形)の墳丘が復元されています(写真1)。名称を「方形周溝墓」(ほうけいしゅうこうぼ)といいます。方形周溝墓とは、いったいどういうものなのでしょう？

【方形周溝墓とは】

方形周溝墓とは、古墳が造られる



写真1 伊興遺跡公園内の復元方形周溝墓

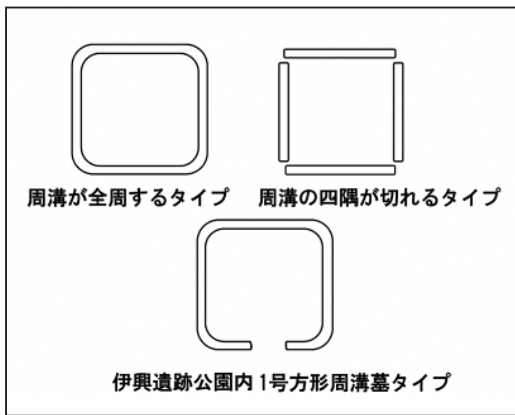


図1 方形周溝墓模式図

【伊興遺跡公園地区の方形周溝墓】  
伊興遺跡公園地区で確認され

この時代は農耕社会の到来とともに低地の開発が進みました。方形周溝墓という墓制は、農耕社会の成立・進展とともに広がっていったと考えられ、低地にも集落と共に数多く造られました。

方形周溝墓は群集して墓域を構成することが多く、そこには主軸方向の一致や列状の配置、周溝の共有など、計画的な造墓が考えられます。

以前の墓制で弥生時代前期に近畿地方付近で出現し、東北地方南部から九州地方まで普及しました。この時代の代表的な墓制といえます。方形周溝墓は古墳時代前期頃まで造られており、古墳が造られるようになってからも、方形周溝墓が造られなくなつたわけではなく、重複する時期もあります。

近年では朝鮮半島でも方形周溝墓が発見され、その関連も注目されています。

大きさは一辺約五〜二〇mで、幅約一〜二mの溝が方形にめぐっています。溝で囲まれた中に低い墳丘があり、そこに埋葬主体があります。被葬者は土壙や木棺などで埋葬されています。

発掘調査時に周溝が検出され、方形周溝墓と分かることが多く、復元された方形周溝墓も、墳丘や埋葬主体は残っておらず、周溝のみ検出されています。

副葬品は多くはなく、主体部から玉類や鉄・銅製品が出土することがあります。方台部や周溝には土器が供えられ、意図的に穴を開けたものや破碎されたものもあります。木製品が出土する例もあり、様々な儀礼が行われたことがうかがえます。

方形周溝墓の周溝の形には様々なタイプがあり、関東地方では最初に、四隅が切れるタイプのものが出現し、やがて周溝が全周するものが登場します(図1)。方形周溝墓は、後の古墳へとつながっていくとも考えられています。



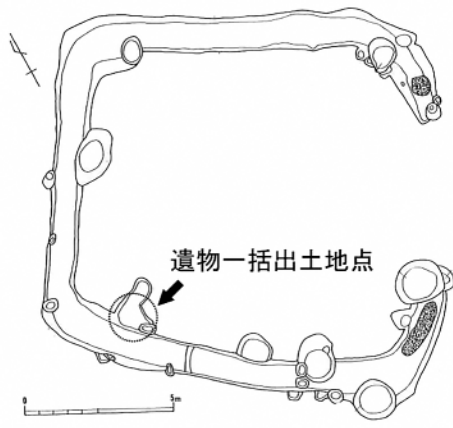


図2 1号方形周溝墓図面

方形周溝墓には埋葬施設が伴いますが、1号方形周溝墓の埋葬施設は後から造られた複数の住居址や土坑によって破壊されたものと考えられます。周溝の形は、南東側に「ハ」の字に開き一周せず、北角と西角がほぼ直角に曲がっています(図2)。溝は直線的で方形です。周溝墓の大きさは長辺5.5m、短辺5.3m、周溝幅は平均48cmで、深さは西から東に

【1号方形周溝墓】

た方形周溝墓は4基あります。通常、遺構の検出は調査区内に留めませんが、1号方形周溝墓は遺跡公園の保存・活用に伴う復元のため、遺構全体を検出しました。2号・3号方形周溝墓は、北溝のみ確認し、4号方形周溝墓も、周溝の南西角のみ確認しました。

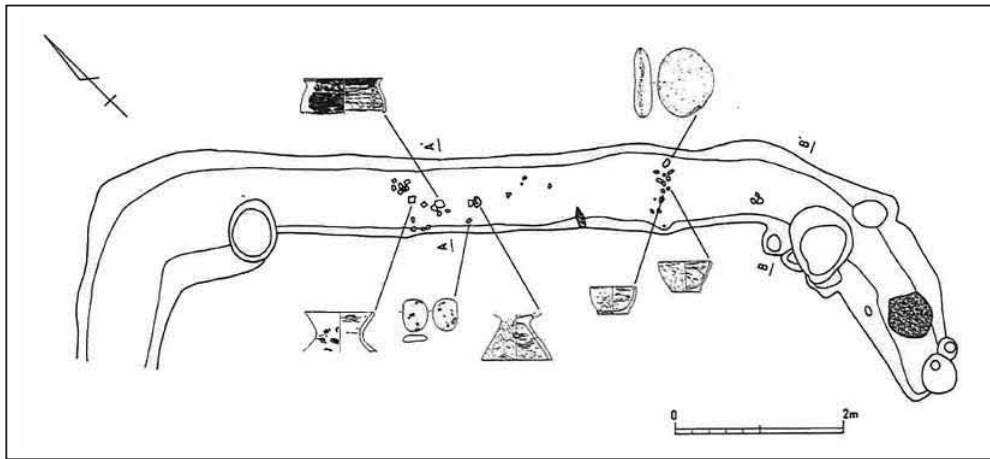


図3 1号方形周溝墓遺物出土状況(北側)



写真2 (左側) 台付甕、(右側上) 埴・(右側下) 器台

【現在の伊興遺跡公園】  
伊興遺跡公園の敷地内で発見された方形周溝墓は、調査後埋め戻されているので現物を見ることはできません。ただ、1号方形周溝墓は公園内の東側に復元され、その姿を見ることが出来ます。遺跡公園などで方形周溝墓が復元・展示されているのは、あまり例がありません。伊興遺跡公園に是非見に来てください。  
(遺跡発掘調査員 上野未来)

向かうにしたがって緩やかに上がり、浅くなっています。溝端部では急傾斜になります。その部分では焼土が確認されています。火を使った儀礼が行われていたと考えられます。出土遺物は南角より東側の溝状遺構と重なる部分に一括して出土しました(図2)。遺物は、埴・器台・

台付甕(写真2)・甕・壺・高坏や、碧玉製の管玉がありました。北側には遺物はまばらに分布し、鉢・壺・台付甕・高坏等、白玉や磨石が出土しています(図3)。出土遺物から、構築時期は古墳時代前期と推定されます。

白玉・磨石や、鹿角の一部、炭化材などが出土しています。出土遺物から、構築時期は古墳時代前期と推定されます。

【2号・3号・4号方形周溝墓】  
2号方形周溝墓は、遺物の出土状況が下層、中層、上層の3段階に分かれています。これは、下層は周溝墓の構築時の遺物で、中層・上層は周溝墓がある程度埋まった状態での遺物と考えられます。器台・台付甕・手捏土器・壺・坏・鉢・高坏・

3号方形周溝墓では、手づくね土器・子持壺の小壺・埴・鉢・白玉などが出土しています。出土遺物から、構築時期は古墳時代中期と推定されます。

4号方形周溝墓は、周溝の南西角を調査したのみで遺物の出土もなく、形態が分からないのですが、北側に1号方形周溝墓が接しているの

で、1号と同様の方形周溝墓と考えられます。構築時期は、1号と同じ古墳時代前期と推定されます。

# お化け煙突60年 ⑫

燃料①  
格和宏典

■揚炭設備 発電所で燃料として使用する石炭は25〜37ミリメートル程度の中塊炭で、常磐炭を中心に九州・北海道炭も使用しました。常磐炭は鉄路で隅田川貨物停車場（現、隅田川駅）に運ばれ、九州・北海道炭は船で東京港の石炭埠頭に陸揚げされ、いずれもダルマと呼ばれる舟に積み替え発動機船（ポンポン船）に曳航されて隅田川を遡ってきました。

戦前は樺太（現、サハリン）からも石炭を運び、構内に樺太石炭（正しい社名は分かりません）の事務所があつたとのことでした。

隅田川岸壁には、グラブ付固定型水平引込式起重機、通称アンローダーと呼ばれる起重機がデンと居座り、その両側に回転式ジブクレーンが据え付けてありました（図1）。アンローダーは、一日500tの揚炭を行うこともありました。

ジブクレーンは、アンローダーの使用中は地下ベルトコンベアーに石炭を落とし、バンカーに直送する役目を担っていました。従って、アンローダーは貯炭用として揚炭直送する時のみ使用しました。

揚炭機の故障や揚炭が間に合わない時は、臨時雇いの作業員がパイ

ケと呼ばれるザルを天秤にかけ、人海戦術で揚炭したといえます。

■第1貯炭場 面積2314㎡（約700坪）、容量5000tで、石炭は、貯炭場にあるホッパーから自

重で地下に落下し、地下ベルトコンベアーからバケットエレベーターでボイラー室上部に運ばれ、そこにあるバンカーベルトコンベアーで各ボイラーのコーンバンカーに落とされ、自重でストローカーに落下しました。

■第2貯炭場 面積3400㎡（約1100坪）、容量1000tで、第一貯炭場東側にあり、ここは機械

力の導入によりホッパーを造らず、リグレミングクレーンとストックキングベルトコンベアーの組み合わせによって、石炭を汽缶B室バンカーエレベーター下部に直接送り込み、第一貯炭場のホッパーに落とされた石炭と混炭され、バンカーエレベーターでボイラー上部に運ばれました。

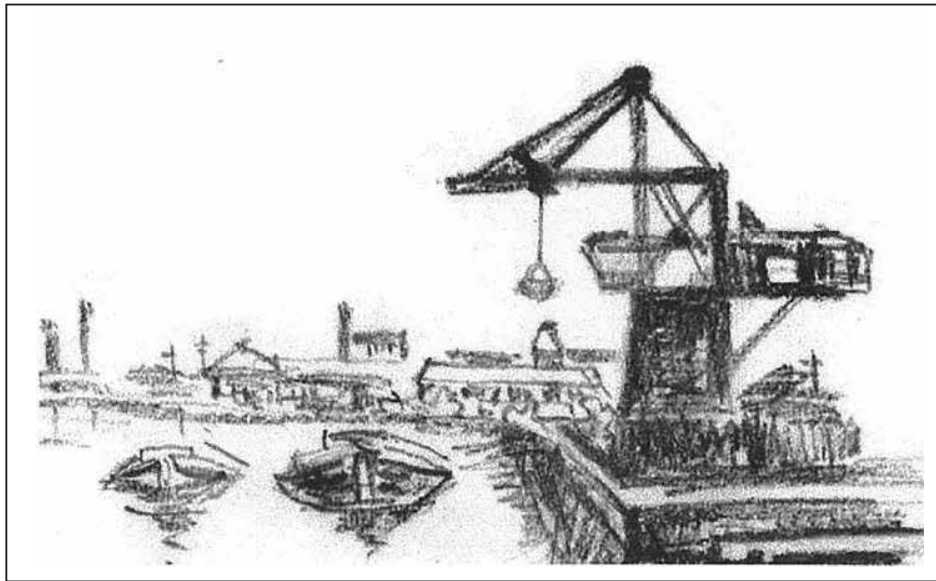


図1 グラブ付固定型水平引込式起重機  
(通称：NO2アンローダー) イメージ図 (格和氏画)  
\*図2のアンローダーも参照。

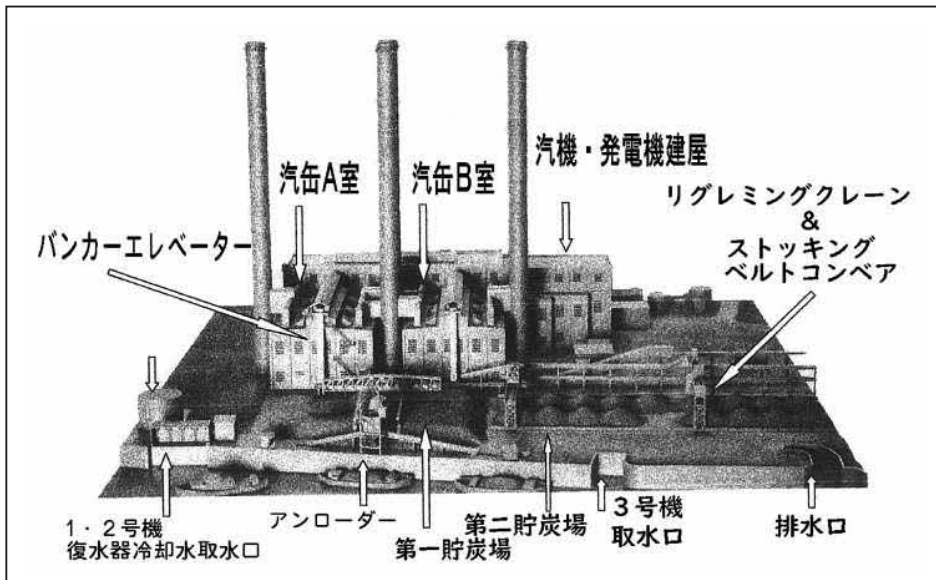


図2 千住火力発電所の諸施設  
足立区立郷土博物館模型写真に加筆